春色英對暖語

弐編

上

へ遠13
840
4

遠へ
門外
840
4

明治三六年
十月十八日
購求

春色英對暖語二編

昔永代橋架始て梨園往来と安房
の国賜ふ所の吟かぶやの戴く端橋の雪を吟
ずるに晋子甘酒の国恵の知恵さえ千橋の
若き係を永く紫ゆる永代の下史の作
者が甘口不假月て題号英對暖語と美

で尤も艶麗で髪本上船の細き喜音が言葉
あなたと浮世流行の嬢の浮出すを言葉八
駄ゆくまで生活の為に青機を仕立
く二三種味噌吸物味と看客の口に合
美味くあるまでする座敷を拵えば相
子を持て採典章の顔かわいがり教育

續俳諧あるば日本一の氣味は春雪の数
もの拵ひ他の作者が上手の風に著
らく波語を標準米町の粉米菓子
月青き蛙の糸物雪の高切なる出
迷ひつつ發明べし本川ゆゑ粉する
ず語を遠国他主の看客を主義

風情雲霧の六角解脱の陶人
狂ばば児女童幼達のよろこぶまでよく知る
御義懲悪の一勧ちらんと云爾

于時天保八丁酉年
端午の節句 柏餅が吟過ぎ

ばくろ者、獄に入り、英雄
編二編目は序文を撰ぶ
江戸人情本一流の元祖
狂訓亭人 為永春水誌

天保九戊戌年春正月發行

知乃花や
うゝき柳は
及びなし
国芳筆

懐
紙
猿紗
拭
美

春色英對暖語卷之四

梅ごよみ拾遺別傳

江戸　爲永春水著

第七回

常ふ関ゑ江ゑゑく嬢〜さゝ月待今日の入相の淋と風雅
ふ詠〜ふ淫やらん主月ゑゑで往男の情ふ引き止宿ゑゑゑ
養ゑくも楽〜春の夜の美ゑゑとゞ男ふ恋ゑゑゑ香ゑゑ梅
の蕾ふ含ゑ〜情ふこゑ中ゑふ美ゑ頼ゑん心のゑゑふ積ふ心ゑゑ
ゑゑめきけゑゑゑと知ゑゑねバ正庵夫婦ハ岩次郎のゑゑ

海の湊と思へば錨をひきいかりて舟子の者よ汐うを見てく居
たり久ぶりの芝浦の初夜の鐘ちるふゆのゆるや居家の内ひ
チョンしく　チョチョン　正「サアモウ戌刻ごそうぢごろは寝なせくよ
自己も寝るうう　ア「アレまぐ私は寝むくもねとものぐるね
ませんうう寒かしお世を呼くく居ますは　正「イヤく朝が起
らまひョ　ア「イエ明日はちやく起きますうう芝さん
おそくおきるのまし　正「ナニく子どもは寝ず芝居の
ばしがまつく　まつくは急ても寝はいつくしませんうう芝居は

寝くばかりくばかりまるませうう　正「ヲく左様ヨトちうそ
ア「そもぶらやアノお房や　ア「アイとやはのあねくトヨぶ優なそ
居る　ア「アノウ幾日までも芝さんをひうるひぐ寝かしく呼く
らみ早くお寝ヨ　ア「アイ私だろう呼くばかりくばかりません姉さん
の方が芝居のお世しを呼くばかりくばかりのヲ　正「イエ姉さんよ
はお寝ひくおねううこうろひョ　ア「ハイそもぶらやア今ふ寝る
ばかりまるヨ　正「アノウ芝さん私どもの寝る所はばかりごエ　ア「ハイ
お三のお寝を寝させくるト　乃文せよびく西屋

後の三人月雪花盛の見る目もあらんかぎりやな
あきことあらうんう　岑「、お前ぐらハ人ぐ茂の菊と市の黒と
どらんう　「イヤ三まぐ見ませんヨ　岑「ヲヤ左様うかせて
よつのねく城の山度の黒ハ仏様あふことびらう山水
前の四ツ谷怪談のお岩ようハモウくくものすごるとも
仏ともうよく様のあのあろしい顔ぐハトいひあぐう四辺
世見まハしく気味ようそあのあ房もうくあうく将
後を見ろう　き「ヨクくとうひとあるく仏様の風情ぐ

どぐあまるく　岑「どん仏様の風情とあるくあるくあるしあ
あくも気味ぐうるひ様ぐヨ　き「アサとうてもよいうう
ああくをしてお国せあるのヨウ兄さん。姉さんも左様もあるあ
ねくトいひくぐあるくふ岑「まあ様あバあるくあるくあるせ様う
うるうぐとうぐうくあうひでハ　岑「様ぐ
気味ようくあう岑ア様の色をあるトのうまくお房ハ
あるもの　計男入夏娘のあの癖を知らぬ人ふうるくぐ　き「イヤ仏様くもも
とハぐうハいくくまんハトあるハ　岑「左様うくぐあるあ

そふがまづまづ羽織が例の時のうつり向ひ合ひでサ　き「イヤ
ト送る日和あるぐらいのよく側へ寄掛く　き「それうつ工　岑「ま
ぐつの黒髪を左右へ振りけく　イヤ　ぐつ目茶めちゃついて
あつあつト小声に言う顔をあつめくいめ　き「あゆうれんまた
のく。姉さんうつと此方へお寄んさいョ　岑「ナニサ今人つを
いめのぐつ目が思ひ出せとちらく振ひすどめといめ
とをサ　き「ヒヒ　岑「ヒヒ　ぐつ目茶の赤みをあどけなく
初めの角ふうく抱てヨト眼をすつく顔をうつを愛中無み

ぐんじまいか　岑「どうしちく　お茶女八よつもの藝者ぐいく
らもよつるぐらうつ　き「イヤ　そんな藝者ぐよつないと
中せんヨ清元延清美とのふ鳴と坂東三津代の振のおうとの
ぐ初第よつるだつぐどざるぬやまいか男達八ぐことハぐぬや
せん　岑「ヲヤ　ヒヒだやう　殿さま八女だつ　お振ごと乃ぐるみ
き「ヲホ　お振ぐどざるぬまいたちぐんぐやせん　岑「イヤ工　お振
だつよつく此春しぐらく左振いめ　お茶さまでハ　お茶の振み
つつ工のハ変ふ此側へ　ぐつ大変ぐつ　左振うと

松本「ヱ　岑「お前はお仕合せでございますよ　チヨツ
とけへ出るところ　松「ヲヤ何だへ　岑「ヱあのウがサ又腫く
なつく来たトおつしやりましたが　松「ヲヤそれハ何事の
お気の毒ふもあるといふがどうでござりますが私なんぞハ何様で
人さまでも損をさせることをいやがるものでそれを喜ぶのでて
直ぐおいらにいふのだがの嫌ひなのハ苦しみをさせまして私どもの様な
ものが損をさせるはどうも大丈夫でござりません　岑「イヤく違ひない
いふてるさいのサ　松「アレまた損をなさる深いことをおつしやる
損がいやヨ私ハ損を浮薄者でハござりませんたとへ一度
でもト敦と云はれるのハ　岑「其所ハヱヘンと嘆すらひさせて
腹で知らせる仕掛も気が付くお房の顔をちよんとみる
岑「アレサ戯言にいふことのごうり言解にハおとふがいひハ子左様
一途に損をお立でハお気の毒ゞお前の潔白な気質で
居るけれどもツイおまへの別深の公易でそうらく今の損を
まふとも云ふのサ　遠慮しておくれヨウお房さんも此の
嘘と仕関くろく大ふお背気でござりまして寝むくおまへの

ゑ 秋「イヱまだ寝むくハないけれど ヲヤさんヨト 欠伸あそびなハ
すて 今夜ハ 心持もちがひまするうちのよいの 峯「左様ならバ
モシ お房さんハ 御遠慮なくお休みなさいヨ さうしても私と同家の
お房さんトいふのハ 私がくり居る所のなか
姉の紅梶がよくハと思ひ居るなるへし 峯「アヽミ 左様さ
見れバ 弟のお蔦ハ 男といふものハ 意地のまがつた奴で
なかなかきうと雅の事を 左様しておるものだヨト いふ
さうかなどもゆるびのかわいらしくお房の手から引き取る

お房ハうなづいてその袖に口をあてゝうつむいて居る 紅
梶ハクワツと額に立てまてどさまにがい顔ていひかねて居る
らしき眼に角を立て 峯次郎を白眼みながらいふよう
「ドレ私ハちよつと小用に往て来ようか 秋「アヽお姉さん私も
御同道に参りませうヨ 峯「イヱまだ二人ハ一緒に来るものか
お前さんハ後で峯さんに気をつけてお貰ひナ 秋「ヲヤ
おやまあ姉さんがねへ私やア峯さんと何でもありハしまひし
ありしのねへ 峯「ヲヤそれだから誰も何でもあると云ふハ左様

ひょ「イヤ　たゞこと　今あんなことをおっしゃるのは　私やあなく
さんみ左様アたョ　「アく　左様おもひ　さう様おもひでもこハ
こハ　ひょサア　今左様のつくおいとたらしゃ　角ずれ
ぬ世なる　おつぐの　奥様　こてゞ生眼の生様　うべ
折ゝつぐる　清の青八　簾ようゝく　ぐく　実の初の
袖迄　カチカチカチ　たるゝの　袂ちで　雲り
雲も　ゝたる　風の　ゝ　「のもつ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ
ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ　ぎ

第八回

岑「アレサ　紅様さん　さ様よ　様を　ぎと　様八子　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
さ様ハ　様ハ　様　様　様　様　様　様　様　様　様　様　様　様　様　様
つく　様　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

岑「ヲツトヽヽまゝ様お聴きをおそぐ急ひ」「ヲヤヽヽお姉上さんハ
岑ゝさんの内宮さんでも左のうねヽちゝしひねヽト
ちをやと」「急でも様ヨお拵てお雪チ」岑「コレサヽヽお新
達ハ分様しとものごろうあり急ぐ婦人雪様をちゝご
ねヽもヽヽ両個ゞ和合おしヨそれぐゞ急ひと私ゞ弁ゝ乳のまゞご
ちヽく機嫌をよくして座まうたゝく座く私ゞ
本を読ぐ岑甘ろう」「ヲヤ嬉しのねヽ」「仏の本でどの
日ろ豆」岑「エ初ようくの紫といへ人情本サ」「ヲヤ私ハお屋

敷で始ての所ろう見ます〳〵京草紙の様よ急ひくあります
あゝこそ岑「左様サ二種ふゝく殺様ゞ子中本の方ハ後
六冊ろめでゝしくゝ満尾くあるうたもくゝ分解くおも
あろのヨ」「ヲヤ三ぢやアたゞめうろう巻まで読でおる
ろうねヨ」「ヲホヽヽヽお座さんでも一冊もいて
お主のろに座てお仕ますひごろう」「イヽエヽ今夜ハ容易ハ
寝るのヨ」「ヲヤるぜヽ」「急でもサト分ろ必ず一物ある
様ふらくバ紅葉ろ分三沙弥ハ急ぐと用ひするも京の秋

たべるのだ　岩次郎　時呼　好男子のまへハ　なのるる　家世の若
男のよりもうるる　恒〳〵　義むべく〳〵　滋陰降火湯の癖を
うらんとを　たまふ　さてもきき　婢女のお三ハ　一昨　夜を三ちあき
うべてあるとのけの　傍くも　烟草の火もとぐく　烟へ　三「サ」
お　傍　探〳〵　まんろお　夜を　延ゃうく　岩〳〵　ヲイ〳〵　左様ろこれ
ぢやア　寒ふ　寒ふ　〳〵　サア〳〵　お房さんも　紅梅さんも　一同ふ
お　傍　ろ　ろのあるアまぐこ　ろすれこことがあるト　なるるのの言
ひ九　茶　をのむ　是ハ　左様　浮利の　ろい　妙　茶　本郷の　浮世　傍を

いの茶　種　屋の　紫金　酒の　別製　ろり　好男ハ　狩　〳〵　ろ　ずんバ　あるべ
うべ　ろ　〳〵　狩　狩の　集ハ　小用場　〳〵　き　猿　側　ま　ま　ま　ま　ま　ま　三
の　茶　用　ろ　引　ま　〳〵　寒　ろ　ろ　いる　岩　次　郎　ハ　義　〳〵　ろ　ふ　男　の
対　〳〵　ま　〳〵　ろ　〳〵　左　存の　秘　具を　空　家　て　ま　中の　後　茶の
中　に　寒　て　焼　火を　拭　ま　ふ　引　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　岩　岩　〳〵
ま　や　〳〵　お　傍　〳〵　お　二　人　ろ　ろ　ろ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　の
ま　ま
ま　ま
ま　ま

顔ふかく紫ばかりの白き風情にて白くぶ袍の三位淀川殿
の御とや載てゆくゆくうとゆくゆくうと婦人の中満ら
紫式部の在左ゝ書流ひ給ふよむ本を紫つくりろゝ
寝入けゝ

唐朝言家の竜妃大真在右ゝ光延寺の名ゝ
らハざるゝ西施を左ふ遠ゝもく紫式部ゝ巫山神
女ゝ美のさゝ拙き美ゝ拙ゝを和ゝ寝ゝ看寝ゝ
こゝを在ゝ在ゝ立ゝ拙まれゝゝ翌日の正ゝつゝらハ

同じ幕の内きゝ供ゝ人ゝ召ゝ出ゝ給ゝ
紅梅ハ元のお母ゝ上ゝ上ゝ上ゝ房ハ父の正ゝ
三位ゝ夏の中旬ゝ過ゝ

ゝらのこゝもゝ

ゝゝハ紫式部ハ源氏の物ゝとて別座に座ゝ
ゝと云ゝ紅梅ハ房のゝゝより分ゝ山の
ゝハ日の美ゝ見ゝ別ゝ殿の周清ゝを始ゝ
ゝ源氏ゝ聞ゝ給ゝ乳母ゝ

ゑどを出し　波見とよばるる中ゆ　ゆうく　漕ぎうる昔船
の法華傳

「新の安珍八歳ゑる　ゆ　一年　紀の国
熊野山　来頭せんとて　支度を調へ　出て　紀
列　見るの　ゆ　一人の寡婦あり　安珍
その　家　旅宿　彼　寡婦　安珍の美貌を　容
ト　漕ぎうる　ゆく　義　出入する　酒屋の　女　小僧

の　家の　方　探　ゆ　「ヘイ　ひとり　女　酒　あつて
ゆく　岑　「ヨヤ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　居　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ぢやア　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ぢやア　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　岑　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

[illegible]くいのようなものを喰ひくくしてうろ[illegible]今日は[illegible]
ぢやア義やせんぜいのぞ美味ものを手柴う武蔵屋へ[illegible]て
[illegible]　考「[illegible]
かしもとうとうねとれようは[illegible]んぞ本を拾て来[illegible]
考「[illegible]ぢやアねへ行ぬの浦世を[illegible]て情人だろう[illegible]
[illegible]
[illegible]三十日[illegible]
今日は[illegible]の[illegible]

理本の見料は[illegible]極つて安のようなものだぜ　考「[illegible]
今日は大分世平海[illegible]
[illegible]　[illegible]「[illegible]
家内へ入ればすぐ[illegible]　考「[illegible]と請[illegible]
[illegible]本を出[illegible]　[illegible]「へイ左様[illegible]ば道成る[illegible]
日[illegible]川へ相[illegible]五と浦[illegible]は二種ぐらいの[illegible]それ[illegible]元
[illegible]新出と[illegible]
すのうま　考「[illegible]左様ヨ[illegible]牧洲亭の門入て尾張の一之宮の

[illegible]
[illegible]永寒蝶といふ者よ形まれく二個ぐ[illegible]成寺浅茅世の
[illegible]
人情本にうらく雪そふといふやくそくをしこのサトいろぐら
[illegible]元亨新出の巻中ぐ安孫の伝を漢うる形しも頃根のか
[illegible]
[illegible]女の声ふく　女「[illegible]　磯「[illegible]今ふ[illegible]ちょもしく形板ぐ
[illegible]　磯「ハイ[illegible]今条じ[illegible]　女「イく[illegible]今
ハ梅の湯へ注ぐ浸でも[illegible]　磯「ハイ[illegible]アア[illegible]
本をよく[illegible]ト[illegible]本をりつく久[illegible]
[illegible]岩次郎ハ[illegible]川の浦ぐ本をあけて波し[illegible]

[illegible]考へく居る
「[illegible]
[illegible]男女地へ[illegible]私ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]鼻のうへ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

参ハテ注ふうよく出来さ浄るとぶ行儀も娘の人情の振
でれく出うぐ考しとさだの初うんとうう見るを歌舞
妓の道成寺ハうまく出来しさめご茶屋の狂言を捨て
ふ恨うのうう積人のおそろしき出来見せる茲角ハ如ふまく
出来さ狂言ごそれを焼率しく見物せびつうさせさ女清
玄ハ故人南北ご代のる柄ご拘でも今様ょ清振をしても
花屋うう蝶ょうれく出来る市西風白稲子のすぐうハ
ぶも法人の目ふ外場ごうう色彩あの風俗をば見せて
ものごトあきうふ又風もあるのにとて性ありける考次郎六月
十日の暑き日もコ午れく一ふ安ものご入るき稼例へものの
うげのひうとううるふ経るき見ようれば今ハ中ょううるる
波乃成寺の白狐子の姿ょの焼率ようしを稼の上ふとび
ようう完ふとしてうぶあば男ハどハット考次郎ハうまく
そこ西へ市伏うるが白蛇のこを出来乳をとて車ーみを張て
よく見れば三三伯父正庵の娘ふく例のお房ありけまば
ふうく不安振しく考ヲハ房さん行振しを来ンゴエ

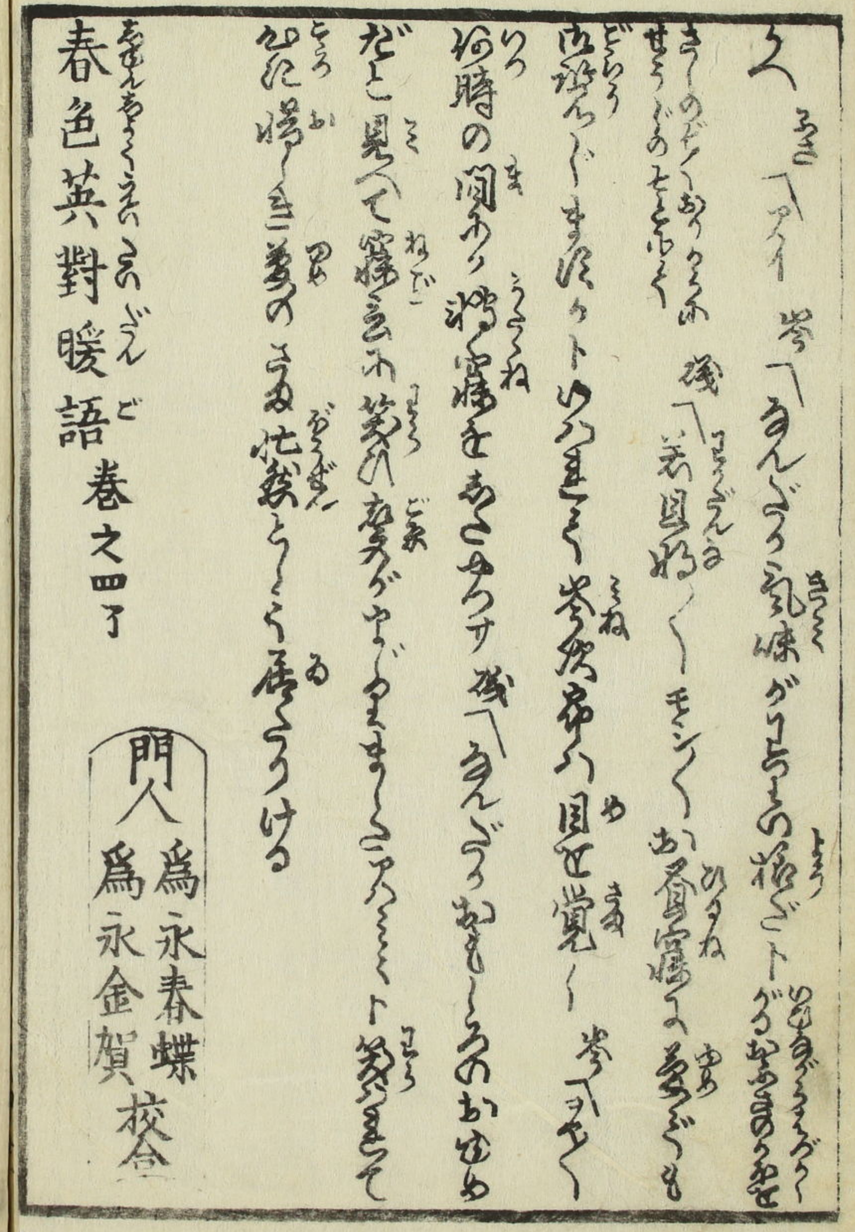
きき「アノウお松さんハこのあいだまで出なさりまして参りました　松「イヤく
左様よくお其ごッけ子宮にびっくりなさる　きき「イヤまあじ
ござりますへ　松「エヽ今丁度手形容の風を考へて居ました
ろうサ　きき「ヨヤく左様でござりますか　松「そうさアいくぢア
その女房衆を腹ぢチット涼しくあくまつてうちやアなまえく
ドレ浴衣を出してやりませうてお供ハ誰が来ましたのだへ　きき「不足今
日ハ母人さんも誰も来ませんがお前の所に出るものが大勢で
お供まで来ましたら病人ハ此先の別荘へ往くのでござります
すぐの所の別荘で其処へ船頭さんに送られてまゐりまして只一人
参りました　松「ヨヤ其船頭ハ何うしてへ　きき「お前さんハ
直に帰しましたヨ　私やお三どんに左様申して来たお姿へ
静に歩きまして兄さんを頼みましてあとからゆつくり出かけますへ
来るこのサ　ヨホヽヽヽト　はなしてゐるお房が今日のうわさをしてゐるのがくやしきやうす
帰りますれば其お前ぞく姉の　まゐりかゞやお世話の衆へまゐりますろう　松「そうさアマア帰りましてのちほどく
けんか其うさやア帰るハお前が送つて行くがあるなへ連が
来るさいくらあぶなくても一人で来ねへさぞ母人さんが案じて

おまるさるゝらく　「イヤ母人さんが後ろ山へまわる
ちづく流人よ殺んでよう〜まつヨ　万一今夜母人さんが来て
おつまつぐ　ものと　私やアはさん　▲とのとてぶつ世けんの恥さらしもがけとも〜
▲とも大ごとうくのごつ〜とのころもとうこ
俗父さんとうやまん俗母さんとよぶまぐれ分
ようぐ〜大哥とのことをえ〜　の所へ　止宿つりうとで来りまつ〜ぶ
のでもありあまことうんか
ふつく〜まま私を久ひ〜〜しい娘を出へ出るまつアハ〜〜
ようつうちぐ　止宿て男人を久ひうがいくうそれぢやアあぐ
らう　「ヲホ〜〜〜　分殺して私を久ひぐつくおつまるまるのつま

兄さんの久ひぐるのハおあ家の姉上さんだろうサ　「ヲホ〜
らんぐるをいつ〜〜分殺して　ま殺ゑこまぐあるものつ誰ぐ
左殺いつこ　「ヲホ〜〜〜　私ものやアようく知ぐ居まぐハ
あのまつこ
まつ殺ぐハ　「アイヤ三月
流人で止宿こ第　お前さんが私を久ひぐる殺ぐ殺ぐ
の時に　姉さんが一途ふ　ものつく殺を　おこの私第とあつ
きつく　おのやまつぢやアどぐるませんか　「ナニうそ
だろうこちやアいぐが行ぐ　あつるぐらう早く海岸

若うくくこの高雲をばお三の干させるぶいくまと来く
アて高雲を脱せ 浴衣を着せ久くうぐらう自様で袴の
あくうをちづくふ越くゆる 客「ハイあ ぐうくまを脱ぬ汗
ハ出ませんヨ 客「わんあノウ 私見細ゆ不ゆる ウ汗ハ出ぬの
袴ぐ ちくく 好さんようハ きも白くあく太閤くゆる
くく 袴のるくふらくあドレ 乳を 着ぐ ゆらくうま 客「
袴いくくく 私の乳ハまぐ ぬ袴へ引 ちくあうまヨ
客「ナニ 紅梅さんようも 乳房ぐ 大きい袴ぐ 客「ソレ

ぬ袴ゆるさのゆ帰よさんをあくハ ぐうの湯 客「袴ゆ上ゆで
私くちまぐヨ 袴くくの 客「ナニサ そまも 着物を着くア
帰に 見くのぐうナ 客「くそをあはゆあねくそれとも 帰上
さんあくあひぐゆひよ 遠ひ ゆくハ どうぐ 私をくハひぐう
てあくんゆさいゆまとちづくくくハの切くいくその 泉の
あの 泉くくくさ 客「決帰ハ くハゆくくも ゆくくくく 客「コウい 房ぐう
お 着アノ ゆん 乳で ま袴 ちをいくハのく 客「アイ ぐうぐ 袴ぐん
お 内 家さんよ ゆくくハぐうゆ ま ハト 家 帰くバ 客「 高 家



春色英對暖語卷之四了

門人 爲永春蝶
爲永金賀 校合